

宮沢モリエ

大阪青山短大

目的 阪神淡路大震災から、3年が経過し、実際に震災を体験した立場から今日までの復興の様子を身近に感じてきた人もいれば、メディアなどによって震災の恐怖を味わった人もいる。1996年の「震災による睡眠環境の変化について」の発表¹⁾においてライフラインの確保と危急時に際しての心構えが、ストレスを減らし良い睡眠環境をつくり出すことがわかった。本報では住宅全般および震災後の防災意識の変化について調査を行った。

方法 現在、近畿地区に居住する短期大学生を対象に1997年11月にアンケート調査を行い、有効票218票を得た。調査内容は、地震の影響の有無、震災時の恐怖の程度と被害状況、震災前から現在に置ける防災対策の有無と推移などである。

結果 調査対象者の内、地震の影響を受けたのは154人である。震災時の恐怖感は「かなり怖かった」人が一番多い。怖さは現在でも「よく思い出す」人は5人、眠りが震災前の状態に戻らないのは4人にすぎないがその恐怖感が3年後も残っていることは、震災当時大変な思いをしていたと考えられる。また、水道・電気・ガスのライフラインでは延べ99人が「切れた」とし、切れた人は風呂、トイレ、炊事につながる水の大切さを実感していた。家の被害があったのは70人であり、震災当初、余震などに対する恐怖感から種々の防災対策が1ヶ月以内には施されていたが時の経過とともに防災意識が薄れている。住宅における希望条件として、多い順に日当たり、耐久性、耐震性、周囲の環境となり、震災時の恐怖感と共に地震対策への意識が強まっている。

1) 宮沢モリエ：震災による睡眠環境の変化について，日本家政学会第48回大会，1996